

2020年度 教育支援プログラム(C) 成果報告書

取組名称	Seinan Vis Moot
テーマ 該当番号に○	I. 国際社会への貢献 II. 産業界との連携 III. 地域社会との連携 IV. 小中高との連携
取組責任者	中原 萌
取組担当者	<p>21am001 阿部 晃彩華</p> <p>21am054 今村 菜里</p> <p>21am030 中橋 亨</p> <p>21am087 松村 明瑠桃</p> <p>21am092 安川 由莉</p> <p>21al193 立野悠介</p> <p>22am010 大倉 幸雪</p> <p>22am063 桑山 亮</p> <p>22am073 中嶋 鋭延</p> <p>22am076 中原 萌</p> <p>23al131 河野 琴梨</p> <p>23am098 森山 夏琳</p> <p>23am014 小野 桃果</p> <p>23am036 松原 菜月</p> <p>23am039 宮脇 直弥</p> <p>23am052 稲田 朱里</p> <p>23am057 梅田 知世</p> <p>23am088 永江 華子</p> <p>23am096 峰 結愛</p> <p>24am015 砂坂 栞吏</p> <p>24am057 大平 樹梨</p> <p>24am061 尾崎 央虎</p> <p>24am073 谷川 愛海</p>
取組助言者	釜谷真史 先生

1. 取組の概要 (200～300字程度)

5W1H (who, where, when, what, why, how) を意識し、取組内容・目的を具体的に記入してください。

【概要】

模擬国際商事仲裁大会(VisMoot)のウィーン大会・香港大会・日本大会の出場に向けて活動を行う。所属メンバーは法学部法律学科・国際関係法学科の1-4年生で、金曜5限に全メンバーと釜谷真史先生、弁護士の先生方をお招きしてZoomを使用し会合を行う。VisMootとは、世界中の約400校の法学部生・法科大学院生が参加する模擬国際仲裁大会で、国際取引上の架空の紛争について、売主・買主それぞれの弁護士に扮して、仲裁人の前で法律を武器に戦うものである。メイン大会はウィーン、香港で行われ、日本大会はそのプレ大会として開催され、日本語の部・英語の部に分かれて試合が行われる。

【目的】

社会問題やビジネスにおける課題を解決することができる人材を目指し、法的思考力と英語力を同時に鍛えることにより、国際化したビジネスの場で法的側面から活躍できるスキル、および自分の考えを説得的に伝えるスキルを養う。

【方法】

1. 法的思考力： チーム内で口頭弁論の模擬試合を繰り返し行うことで、論理の飛躍がないか、条文に沿った法的主張になっているかを指摘しあう。
2. コミュニケーション力： 毎週の会合以外の時間にも日ごろから自主的にメンバー同士で連絡しあい、会合準備を進める。特に今年はコロナ禍のため、直接顔を合わせる事が一度もできないため、例年以上に密接に連絡を取り合うなど、チームワーク向上にむけて工夫する。
3. 英語力： 今年度前期は初の取組として、本来の会合の時間とは別に、英語力強化のための会合を毎週行った。内容はリスニング・文法問題・スピーキングで、問題制作や解説などすべて自分たちで運営した。今年度はウィーン大会、香港大会ともオンラインで実施されることが決定しているため、後期はその経験を活かしつつ、全員がいずれかの大会に参加し、実際に海外の学生たちと英語で法的な議論を行う経験を積む。

2. 活動内容

経費の有無に関わらず、本取組の活動内容を時系列で記入してください。

【前期】

- 新メンバーを加え昨年度の大会用の問題（英）を読解
- 海外の優秀校の準備書面を読解・法的主張の作成
- 口頭弁論（日・英）の練習・チーム内試合
- オープンキャンパスにて口頭弁論（日・英）のデモンストレーション（今年度は Zoom にて学内外の方に向け配信）

【後期】

- VisMoot 本部から今年度大会の問題が公開、読解
- メンバー同士で議論し、西南 VisMoot チームとしての法的主張を作成
- 準備書面（英）を作成・提出
- 口頭弁論の準備・練習・大会出場メンバーの選出
- 弁護士の先生をお招きし口頭弁論の公開実戦練習を開催（Zoom にて学内生や学外高校生に向け配信）
- 日本大会出場
- 香港大会・ウィーン大会出場

3. 得られた成果

<申請当初の目的・計画の達成度>

申請書の「3. 達成目標」と照らして、どの程度の達成度であったかを記入してください。

今年度達成目標として掲げていたのは、以下の2点である。

(1) 達成目標は、日本大会日本語の部での4連覇、英語の部での入賞である。

(2) 目標の達成により、SeinanVisMootのよりよい伝統を築き、メンバーもSeinanVisMootでの活動を糧に、自信をもって今後の進路等を切いて開くことができると考えている。

(1) について、目標通り日本大会日本語の部で4連覇、英語の部ではチーム史上初となる準優勝を達成した。

(2) について、例年達成してきた日本語の部優勝という伝統を引き継ぐことが出来た。また、英語の部入賞という新たな記録を立てることができた。今年度でチーム及び大学を卒業したメンバーは、日本大会までチームのサポートに尽力したのち就職、資格試験の勉強など多種多様な進路に進んでいる。また、日本大会での結果を糧に、現メンバーも海外大会出場のため準備を重ねている。

<優れた成果があがった点>

活動を通して特に成果があがったと感じた点について記入してください。

日本大会英語の部準優勝という結果は特に大きな成果であると考えている。今年で4年目となるSeinanVisMootは、初年度から日本語の部での優勝を続けてきたが、英語の部での入賞はSeinanVisMoot創設以来の悲願であった。法的思考力と英語力を同時に鍛えられるVisMoot大会に4年間チャレンジし続けてきたチームにとって、英語の部で結果を残せたことは、チームが着実にレベルアップしてきたことを示す大きな一歩であった。

また、この1年間の活動をオンラインで進行する中でも例年の結果を維持、さらに結果を出すことができた点も大きな成果であると考えている。

今年は新型コロナウイルスの影響により、対面での活動が制限され、Zoomを使用したオンラインでの活動となった。そのような状況の中、お互いの表情が読み取りづらく、閉鎖的になりがちなオンラインの環境下において、躊躇なく発言し自分の状況を打ち明けられるチームにしたい、という思いのもと、【直接会えない状況でも近くにいるような環境を作る】というチーム目標を掲げた。

実際に活動を始めると、対面での議論よりも円滑さに欠けたり、発言することを躊躇してしまったり、それぞれの理解の進度に差が生まれ、議論が進まなかったりすることもあった。そこで、メンバー一人一人がこのチームになくはない存在であるということを互いに心に留め、LINEやZoomを駆使して可能な限りコミュニケーションをとる機会を増やした。それによって、互いの理解を助け合い、それぞれが自信をもって議論に参加できる環境を、徐々に作り上げていくことができた。これまで以上に苦しい状況での試行錯誤の日々だったが、オンラインでもチームワークを発揮し目標を達成する経験・術を得られたこと自体が、大きな成果だと感じている。